



脊椎カリエスの正岡子規が死

の2日前までその闘病を綴った『病牀六尺』が出版されたのはもう百年以上も昔のこと。そして今、闘病記は文学における一つのジャンルとして確立しつつあります。

私も仕事柄、多くの闘病記を読みます。良い作品には、著者(話者)の客観的視点があるように思います。ただ感情にまかせて書いてみても、誰も読みません。どこか醒めた目で客観的に、死に近づきゆく自分を観察して書くことこそが、プロの仕事なのでしよう。

小説家で評論家の橋本治さんが、1月29日に亡くなりました。70歳でした。死因は肺炎とのことですが、長く闘病をされてきました。筑摩書房のPR誌で橋本さんは「遠い地平、低い

92 小説家 橋本治さん

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

視点」というエッセーを連載されていて、時折、御自身の病気にも触れていました。

その連載によれば、橋本さんは9年ほど前に、「顕微鏡的多発血管炎」という原因不明の難病にかかっています。

これは、顕微鏡でなければ観察できないほど小さな血管に炎症が起きて、出血したり血栓が

できる病気です。主に、毛細血管が多くある腎臓や肺や皮膚に大きなリスクを与えます。早期発見できないと、腎不全や呼吸器不全で命を落とすこともある難病です。

橋本さんは、投薬治療によってこの病気を寛解させました。しかし昨夏、大変治療の難しい「上顎洞がん」と診断されました。

〈頭蓋骨の眼の大きく穴の開いた空洞の下の部分―鼻の横のへっ込んだ部分为上顎洞で、ここに出来た癌です。牛で言う「牛頬肉ワイン煮込み」とか「ビール煮込み」の料理に使われる部分が癌です。もうこの先、そのテ



の料理は食べないでしょう〉(2018年10月号同連載より) 発見時はもうステージ4でした。しかし橋本さんは先の血管炎で腎機能が低下

していたため抗がん剤を使うことができず、がんの摘出手術を行うことになりました。顔の肉を切り取るのです。〈「ロン・パールマンが特殊メイクをして演じた顔をボロクソに殴られたボクサー」のようになりまし

た〉(前同) どのがんが一番辛いか? と訊かれることがあります。どのがんも多少は辛いよ、と答えませんが、顔の一部を失うこのがんには、また別の悲しみと痛みが伴います。術後に鏡を見て衝撃を受け、そのまま鬱状態となり自死する人もいます。しかし、その後も橋本さんは、辛い放射線治療に耐えながら、書く仕事をやめませんでした。

〈癌はどこかで「他人事の病」だった。だから私は癌をバカにして、「さっさと治る」と思っていた。しかし、癌はもう他人事ではない〉(前同)。一流の作家だから書けた病のリアリテイ。このエッセーは今月、書籍化されるそうです。

一流だから書けた病のリアリテイ